# ジグソー法 解答例・解説

|  |
| --- |
| Aグループ  p.117 4行目「いよいよ出られないというならば、俺にも相当な考えがあるんだ。」  p.119 4行目「なんという不自由千万なやつらであろう！」  Bグループ  p.122 13行目　その結果、彼のまぶたの中ではいかに合点のゆかないことが生じたではなかったか！  Cグループ  p.126 1行目「そんな返事をするな。」  次の3点について考えながら、山椒魚の心情や考えの変化を読み取る。  a. 変わったポイントはどこでしょうか。  b. どのような気持ちからどのような気持ちへ変わったのでしょうか。  c. なぜそのように変わったのでしょうか。  ◎「なぜ、どの部分からそう言えるのか」を意識しつつ、考えてみましょう |

まずはAから。

|  |
| --- |
| Aの回答  どのような気持ち・考え方か  **・自分の状況に悲しみつつも虚勢を張ろうという、強がった気持ち。**  **・自分の状況を省みずに他人のことを嘲笑する、独りよがりで浅はかな考えかた。**  （解説は以下） |

まず、山椒魚の状態を考えてみましょう。どう考えても絶望的な状況ですよね。岩屋から出られないんですから。

しかし、この山椒魚のセリフをみると、自分には「相当な考えがある」とか、めだか達を「不自由千万な奴だ」とか言って人のことをバカにしていて、あんまり危機感は感じられない。

どういうことでしょう。これは１つには、**虚勢を張っている**んですね。これは直後に「しかし、彼に何１つとしてうまい考えがある道理はなかった」と言っていることからもわかりますが、それがはっきりするのは、その前と対比した時ですね。116ページでは、「山椒魚は悲しんだ」「狼狽しかつ悲します」「重いぞ屈した」なんて書いてある。そして、そのあとで、「うまい考えがある道理もない」のに、「相当な考えがある」と言った。これは、山椒魚がこの状況に対してできる抵抗は虚勢を張るぐらいしかなかったからです。

けれど、もう１つポイントがあります。実は山椒魚は、自分の状況のことを、**あまり深く考えていない**んですね。自分の絶望的な状況に気づいていない。いや、冒頭1行目で「山椒魚は悲しんだ」って言ってるぐらいですから気づいてはいるんですけれども、実感が湧いていない。これ、どこから読み取れるでしょう。どう考えてもどうしようもない状況なのに「相当な考えがある」、まあなんとかなるんだと言っているところ、そして何より、自分が一番不自由な状況なのに「めだかは不自由千万なやつらだ」なんて言っているところから、ですね。

というわけで山椒魚は、Aの段階では、悲しむ一方で、虚勢を張っているし、自分の状況について深く考えていないと言えます。

つぎ、今度はBの言葉を見てみましょう。実はこの文は難しい。大学生でも間違う人がいるぐらいのところなんです。

何が難しいかというと、この「合点のゆかないこと」は何か、というので間違えやすい上に、さらに、それに対して山椒魚がどう思ったか、も間違えやすいんです。つまり二重に間違えやすい。これを両方できたら相当なものです。

けれど、文章をきちっと読めば答えはわかる。「文学は客観的に読める」んです。

さて、解答を見てみましょう。

|  |
| --- |
| B  「合点のゆかないこと」とは何か  **→狭いところにいるのに、無限に広がる（真っ暗な）空間が見えたこと**。  「合点のゆかないこと」を山椒魚はどう思ったか。  **→好ましいものだと感じ、この状況がずっと続いてくれたらいいと思った。** |

まず、「合点のゆかないこと」は目をつぶると起こった。これはいいでしょう。「合点のゆかないこと」は目をつぶると起こった。ここまではいい。問題はその先です。目をつぶった後のなにが「合点がゆかない」のか。それに対してどう思ったのか。

そこが難しいわけです。

さて、それを考えるために、まずはこのくだりの少し前の部分を見てみましょう。

121ページの山椒魚のセリフを見ますと、ああ神様、どうしてそんなことをするのかというふうに嘆いています。その1ページ前のところでえびの様子を見て、外に出たくなってしまったわけですね。山椒魚は、なんとしても外に出たいのに、それができない。それで嘆いている。同じページのまんなか辺には、「発狂した」「もはや我慢がならない」とまで書いてあります。

そんな彼は、「合点のゆかないこと」に対してどのような態度をとったか。122ページの11行目を見てください。山椒魚は、「まぶたを開こうとしなかった」んですね。つまり、「合点のゆかないこと」が長く続いて欲しいと思ったんです。山椒魚は、「合点のゆかないこと」が良いことだと、喜ばしいことだと考えているわけです。ここが重要です。「合点のゆかないこと」を、山椒魚は、肯定的に捉えている。よいものだと捉えているんです。

ここが勘違いしやすいポイントで、直後（121ページの最後の方）に「巨大な暗やみ」だとか「深淵」だとか書いているものだから、ついついみんな、「合点のゆかないこと」イコール悪いものだと考えてしまう。でもそうじゃない。「まぶたを開いたり閉じたりする自由...だけが与えられていた」（122ページ11行目）状態で、つまりまぶたを開いても閉じてもいいけどそれ以外はなにもできない、という状態で、彼はわざわざ「まぶたを閉じる」という選択をした。これはつまり、山椒魚は、まぶたを閉じたかったということです。「合点のゆかないこと」が長く続いてほしいと思った、ということなんです。これが２つ目の問いへの答えになります。

ではなぜ、「巨大な暗やみ」や「深淵」なんかを山椒魚は好んだのか。長く続いてほしいと思ったのか。

それを解く鍵が、このちょっと前の部分にあるんです。そうですね。山椒魚が、えびの様子を見て外に出たくなって、ああ神様、なんでそんなひどいことをするんですか、と嘆いていたあたりです。山椒魚は、とにかくもうこの狭い岩屋から出たくて出たくて仕方がなかったわけです。そうそう、121ページのまんなかあたり、「すでに彼が飽きるほど暗黒の浴槽につかりすぎて、もはや我慢がならない」ってありますね。とにかく山椒魚は狭いのが嫌だ。

そんな時に、ふと目をつぶってみたら、「巨大な」暗やみが見えた。「際限もなく広がった」深淵であった。狭いのが嫌だ嫌だと思っていたところに、広い空間が見えたんですね。それで山椒魚はちょっと気持ちが落ち着いた。この広い空間を、もっと眺めていたいと思った。そこで山椒魚は、「閉じたまぶたをひらこうとしなかった」んです。

では、最初に戻って、これのどこが「合点のゆかない」のか。これは123ページの1行目にも書いてありますけど、実は常識的なことです。**「本当は狭いところにいるのに、どこまでも広がる空間が見えたから」**というだけのことです。普通、目をつぶったら真っ暗で、どこまでも続いて見えるなんて当然のことですけど、山椒魚はそれに感動している。なんでか？　ずっと狭いところに閉じ込められていたからです。とじこめられていたから、広いと感じただけで感動した。これも本文に書いてありますね。さっきも言った、123ページの1行目あたり。わざわざ作者が丁寧に書いてくれているわけです。

というわけで、１つ目の答えは「狭いところにいるのに、無限に広がる（真っ暗な）空間が見えたこと」ということになります。

では、このAからBへの山椒魚の気持ちの変化を考えてみましょう。

|  |
| --- |
| A→B  変化したポイント：  →**「くったくしたり物思いにふけったりするやつはばかだよ。」**  どんな気持ちからどんな気持ちへ？：  →**「頭の中で理屈をこねるばかりで自分のことを省みず、他の生物をバカにする気持ち」**から、  **「（できることを懸命にやることを重視するも達成できず、）自分の状況を絶望的に感じる気持ち」**へ  なぜそのように変わった？  **→一所懸命に生きている小エビを見たから。また、岩屋の外には出られなかったから。** |

A（116-119ページ）の時はどうでした？　そう、「相当な考えがある」と言ってみたり、めだか達を嘲笑したり、人のことをバカにしている。そして自分の絶望的な状況に気づいていない。いや気づいてはいるんですけれども、あまり深く考えていない。「相当な考えがある」、まあなんとかなるんだと言ってみたり、自分のことを差し置いて「めだかは不自由千万なやつらだ」なんて言ったりしている。

それがB（121-122ページ）になるとどうか。嘆いてますね。神様にまで訴えている。そして目をつぶったら見えてくる束の間の「広さ」なんかに喜んでいる。どうみてもAの時とは違う。自分の現状のヤバさにうろたえているわけですね。ではその原因は何か。なんでしょう。

答えは、小えび、ですね。Bの解説の時もちょろっと言いましたけど、小えびをきっかけに、山椒魚は外に出たくなる。

小えびが出てくるのは、119ページの後半です。けれど120ページの3行目の時は、「虫けら同然のやつ」なんて呼んでいる。自分のことを差し置いてバカにしている。Aの状態なわけです。

ところが8行目にはどうでしょう。山椒魚は途端に、「岩屋の外に出なければならない」といっている。Bの状態になっているわけですね。

とすると、このAからBへの変化は急激で、この3行目から8行目の間に起こっている。どこか。「くったくしたり物思いにふけったりするやつはばかだよ。」ここですね。山椒魚は、えびを見て、最初はバカにしていた。けれど、小さいなりに、えびなりに、頑張っている。できることをやろうとしている。それに引き換え自分はどうだろう。頭で考えるだけで、何もしない。他の動物のことを散々不自由だなんだと言ったけれど、何もしていない自分こそが最も何もできない存在ではないか。えびを見て、そういう風に思い始めたわけです。9行目、「いつまでも考え込んでいるほど愚かなことはないではないか」というのはそういうことです。自分はえび以上に何もしていないぞ、と気づいたわけです。

まあ結局は、外に出ようとしても頭がつっかえて出られなくて、神様に向かって嘆き始めるんですけどね。ただ、この小えびの様子を見たこと、ここ（120ページ7行目）が転機となって、山椒魚の考えは、**「頭の中で理屈をこねるけれど自分のことを省みず、他の生物をバカにする気持ち」**から、**「できることを懸命にやることを重視するも達成できず、自分の状況を絶望的に感じる気持ち」**へと変わったわけです。

そしてその変化の理由は？　**一所懸命生きようとする小えびを見たこと**、そして、その努力も虚しく**岩屋の外には出られなかったこと**、ということになります。

ちなみに、山椒魚がAの段階では自分の状況をよく考えていなかった、自分のことを省みていなかったというのは、Bと対比することでよくわかります。山椒魚の状況について冷静に考えたらBの時みたいに嘆きに嘆くわけです。ところがAの時は、山椒魚の状況は同じなのに、どこか余裕がある。これは端的に、あまり考えていないからだとわかります。

さてじゃあ最後、Cの読み取り。126ページ、山椒魚の「そんな返事をするな」の部分です。

ここも難しいですね。Bからの変化とセットで説明しましょう。

|  |
| --- |
| C と B→C  BからCへ変わったポイントはどこか：  →P.125**「山椒魚よりも先に、岩のくぼみの相手は、不注意にも深い嘆息をもらしてしまった。」**  どのような気持ちからどのような気持ちへ変わったか：  →**はじめは蛙を自分が遭っているのと同じ辛い目を合わせるためのものと考えていたが、2年を経て、蛙へ共感と友情を感じるようになった。**（解説は以下）  なぜそのように変わったのか：  →**蛙の嘆息を聞き、自分と思いを共有していることを知ったから。** |

まず、このセリフは誰から誰へのものでしょうか。山椒魚から蛙ですね。だから、ここの読解には、山椒魚と蛙との関係について考えるのが大事です。

では、互いにどんなことを考えていたか？　ちょっと遡ると、125ページ6行目、「お互いに自分の嘆息が相手に聞こえないようにしていた」とありますね。さらに遡ると、口論をしている。

これをもうすこしさかのぼって、山椒魚サイドからみるとどうでしょう。山椒魚は、はじめはひとりぼっちだった。そこに蛙が来て、蛙と口論をした。けれど2年後、「そんな返事をするな」の頃には、「友情を瞳に込めて」いるわけです。ひとりぼっち→口論→友情。いいですか？

実は、この口論が、「お前はばかだ」「お前はばかだ」と言うことが大事なんです。山椒魚は、ずっとひとりぼっちだった。誰とも喋れなかった。他人に無視されるのはつらいことですけれども、山椒魚はまさにずっとそんな状況だったわけです。狭い岩屋の中で。それが、蛙が来たことによって、話すことができるようになった。**自分の存在を主張できるようになった**わけです。これは蛙にしても同じで、閉じ込められた今となっては、自分の存在を主張できる唯一の相手が山椒魚だというわけです。そうして2年間も、口論をしながら、唯一の相手に自分の存在を主張しながら共に生きてきたわけです。

そうするとどうか。2人の間柄は、**かけがえのない**ものになるわけです。唯一の存在ですから。そして125ページ真ん中、その唯一の存在が、嘆息をした。自分がしていた嘆息を、蛙もしていた。2年を経て、唯一の存在と、気持ちを共有できたんです。**ずーっとひとりぼっちだった山椒魚が初めて、気持ちを共有できたんです。**だからこそ、山椒魚はこれを聞き逃さなかったし、これを聞いて友情を感じたんです。そこで山椒魚は蛙に声をかけた。思いを共有し合いたかったんです。

もちろん蛙からしたら、山椒魚がそこまで思っているとはわかりませんから、今まで通りの調子でつっぱねます。「それがどうした？」と。けれど山椒魚からしたら、はやく思いを共有したい。だから、「そんな返事をするな」と言ったんです。そこから降りてきてよろしい、仲良くしようというわけです。

さて、この友情を感じた背景はもう１つあります。健康状態ですね。

山椒魚にせよ蛙にせよ、最初はまあ元気なわけです。ところが2年後には「もうだめなようだ」、死にかけている。元気な時って、あまり人生についてとか、考えないんですよね。それが死が近づいてくると、自分の生き方とか、存在理由だとかについて考えるようになる。山椒魚もそうで、自分や蛙の死が近づいてきたからこそ、自分の存在について改めて考えるようになって、唯一の主張相手であった蛙のことを考えるようになったというわけです。

|  |
| --- |
| **第5,6,7回の問題作成へ向けて：読解のヒント**  ・文章中に書いてあることから読み取ること。（読解の根拠となる文を示せるように。）  ・読解の根拠となるところを、いくつも探すこと。  ・**比較・関連付け・分類わけ**が、文章を読むときに重要。上の解説でも、そもそもA, B, Cと分類してありますし、A, B, Cが互いに比較されています。他にもこれらがどのように使われているか、探してみましょう。 |